春季講演会

万葉集における豊後の山をめぐって

別府大学教授　浅野則子

大分を歌ったと思われる『万葉集』の歌において風景として山が多く歌われていることが特徴と思われる。

由布岳を歌った次の歌を見ていきたい。

思ひ出づる時はすべなみ豊の国の木綿山雪の消ぬべく思ほゆ

十―二三四一

作者が未詳とされている歌である。あなたを思い出す時はどうしようもなく苦しくなって豊の国の「木綿山」の雪の様に消え入りそうになると自らの恋を訴えている。恋の苦しさに消え入りそうになる様子を技巧としての序詞で例えているのであるが、この歌を歌った人物もその歌を贈られた人物も「木綿山」を見て、その上に残る雪を実感していたに他ならない。いつも目にしている山、そこに残る雪こそが印象的な雪の姿と考えられる。『万葉集』はこの歌の前後に雪を使って恋の苦しさを訴えるものを並べている。都注①の歌と考えられるものである。

一目見し人に恋ふらく天霧らし降りくる雪の消ぬべく思ほゆ

十―二三四〇

夢のごと君を相見て天霧らし降りくる雪の消ぬべく思ほゆ

十―二三四二

「雪の消ぬべく思ほゆ」という表現がまったく同じであることに注目したい。都で恋の苦しさを雪を使って歌う時、その雪は積もっているものではなく、空をかき曇らせて降り、はかなく消えてしまうというものなのである。はかなく雪の様に消え入ると相手に歌いかける雪が豊後では山に残っている雪であるということは、由布岳がそれほど注目される山でいつも見られていたということを示すものであろう。

また、山に囲まれているため、「山を越える」ということが男女の別れを示すことになる歌も残されている

藤井連、任を遷されて京に上る時に娘子の贈る歌一首

明日よりは我は恋ひむな名欲山岩踏み平し君が越え去なば

藤井連の和ふる歌一首

命をしま幸くもがも名欲山岩踏み平しまたまたも来む

九―一七七八・九

藤井連が都へ転任する時に土地に残る娘子[注②]が歌ったものである。名欲山は竹田市の木原山と考えられている。娘子は歌う、「今、二人が見ている山を明日は越えてあなたは都へと行ってしまいます。都へ行くことがうれしくて足に力が入りあなたは堅い岩のある山も元気に越えてしまうでしょう」と。娘子は明日からは藤井連が去ったこの山を一人でみなければならない。山の向こうはもう手の届かない世界なのである。しかしながらこの歌を受け取った藤井連は、娘子の歌の言葉を使いながら娘子を期待させる歌へと転じているのである。「私はあの山を越えても、また戻ってくる、だからどうぞ命を大切にして無事でいて欲しい。戻ってくる時はこちらに来ることがうれしくて足に力が入り堅い岩のある山も元気に越えてやってくるから」と、これから先の二人の再会へと期待させるべく歌うのである。歌を贈られた娘子の喜びは想像するに難くない。目の前にある山は明日からは本当に相手を偲ぶよすがとなったであろう。

このように大分の『万葉集』の歌は身近な山を効果的に使っていることが明らかである。山を見る時に万葉の時代の人の心と私達の心が重なることができるとしたらそれは変わらない風景の力ともいうべきであろう。

注①巻十は四季に分類し、各季を雑歌と相聞にわけた新しい文学意識による分類法により歌を集めた巻である。作者は未詳であり、「柿本人麻呂歌集」の歌もあるが、表現からみると、新しいものが多く、平城遷都後のものが中心となっているというのが定説である。

注②土地の娘子は「遊行女婦」とよばれる。巻十六で明らかにしているように采女として都に遣わされた地方族長の子女が地方に戻り、地方文化を高める担い手となり都から来た官人と接していたと考えられる。